

深刻な医療人材不足の中で

看護師1人が約5000人を、医師1人が約10万人の命を預かる。この事実が、アフリカ南部・モザンビークの保健医療の現状を物語る。生後1年未満に死亡する乳児の数は、1000人当たり115・4人。世界で最も厳しい環境下にあるサハラ以南アフリカ(平均88・5人)の中でも、状況はさらに深刻だ。保健医療サービスへのアクセス改善のため、政府は国を挙げて施設の整備に取り組むが、一方でそれを担う人材の育成が追いついていない。

首都マプト近郊の保健人材養成学校。よく声の通るポルトガル語で話し掛ける、JICA専門家伊藤小百合・ルーシーさんに、講義室に集まった大勢の看護師たちが注目する。かつて日本からブラジルへ移住した祖父母を持つ日系ブラジル人3世として、サンパウロ近郊で生まれ育ったルーシーさん。看護師を経て医師となり、その後は、サンパウロ大学医学部の教授や研究者として、ブラジル医学界の第一線で長年活躍。現在、その豊富な経験と知識を生かし、ここモザンビークに渡り、保健医療人材の育成に奔走している。

ルーシーさんが初めてこの地に足を踏み入れたのは2007年のこと。中進国として発展を遂げたブラジルの経験を、他の開発途上国に移転することを目的に設けられたJICAの「日本・ブラジル・パートナーシップ・プログラム」の一環で、医療分野の短期専門家として派遣された。

「養成学校を訪れると、まともなカリキュラムや教科書が用意されていない。教員の知識レベルも極めて低く、シヨックでした」と振り返る。独立後間もない1977年から15年にわたる内戦を経験し、その間、医療従事者を育てる余裕などなかったモザンビーク。その傷跡が、内戦が終結して20年近い年月が経った今も残る。

**日本の和の心
ブラジルの大らかさ**

「モザンビークのすべての人に、十分な医療サービスを届けたい」。そんな強い思いを胸に、09年10月からは長期専門家として活動しているルーシーさん。



精力的に地方を回り、養成学校の課題を把握し、教員の指導技術向上に努める



モザンビークではブラジル日系人の歴史や存在は知られていない。ルーシーさんの流ちょうなポルトガル語に「どこで習ったの?」と驚く人も多いという

JICA専門家
Ito Sayuri Lucy

伊藤小百合・ルーシーさん



保健人材養成学校で、医療機材の使い方を教員たちに指導するルーシーさん

全国に13カ所ある養成学校などを回り、教員の指導力を向上させるため、保健省の同僚と共に指導カリキュラムの作成などに奮闘している。

「何よりもまず、教員の知識レベル・指導レベルを一定の基準にまで向上させることが不可欠」と考えるルーシーさん。現在、彼女のアドバイスのもとに全国共通の教員用カリキュラム教材の開発が進んでおり、完成後は各養成学校で導入されることが決まっている。また、人数が少ないために権限が大きく、プライドが高くなりがちな医師や、責任感やモチベーションが低い看護師など、医療従事者たちの患者への接し方に違和感を感じる事もある。「養成学校での教員と生徒のコミュニケーションの薄さが、そうした態度にも影響を

与えています。医療従事者という仕事に誇りを持ち、患者さんを大切にするという価値観を、教員に伝えていきたい」。そう考えている。

ルーシーさんはこれまでの人生で、ルーツである日本を強く意識して生きてきた。日系人がブラジルの発展に貢献してきたと評価されることに、彼女自身も喜びを感じている。だからこそ、2000年〜01年にかけて、第二の故郷、日本に渡り、愛知県がん研究センターでJICA研修員として過ごした日々は、かけがえない財産となった。体系的な日本の研究の進め方から多くのことを学び、疫学や予防学などの研究を進め、滞在中に論文を発表するなど多くの成果を上げた。

日本は、長年の支援によってブラジルの医療体制の整備に大きく貢献してきた。そしてルーシーさん自身も、日本で貴重な経験を積んだ。今度は自分が、その成果をモザンビークに伝える番だ。

日本での研修時代に師事し、「私の恩師」とルーシーさんが慕う田島和雄・愛知県がん研究センター所長は、「和を大切にする日本人の心と、何事にも物おじしないブラジル人の大らかさを持った、周囲の人の心に明かりをともしてくる存在」と彼女を評価する。その親しみやすさから、ルーシーさんのオフィスに相談に訪れるモザンビーク人の同僚は後を絶たない。

「私の二つのふるさと、ブラジルと日

養成学校では多くの青年海外協力隊員も活動している。適切なアドバイスを送ってくれるルーシーさんは、隊員にとって頼れる存在だ



いとう・さゆり・ルーシー

ブラジル・サンパウロ州生まれ。1983年サンパウロ大学看護学校を卒業後、同大学心臓病院で看護師として3年間勤務。その後、同大学医学部に進学し、93年より同大学病院にて医師として勤務。その傍ら、大学での研究活動も続ける。2002年、サンパウロ大学医学部教授に就任。04年より、JICA短期専門家として、ヘルレー、パラグアイなどで活動。09年10月より、JICA第三国長期専門家としてモザンビークの保健人材育成支援に携わる。



モザンビーク

ブラジル

南米でもJICA短期専門家として活躍。ヘルレーとパラグアイでは、病院のない山岳地帯やへき地への巡回医療に取り組んだ



「二つの“ふるさと”の誇りを胸に」

日系移民の子孫としてブラジルで生まれ育ち、医学界の最前線で活躍してきた伊藤小百合・ルーシーさん。自らの「ルーツ」である日本を通じて得た経験と知識を手に、今はアフリカ・モザンビークで保健医療人材の育成に情熱を注ぐ。

第18回

ゲンバの風

